

眼根の対象となる「色」は自然環境の中に存在するところのものであるから、これは明らかに物質的存在であるが一旦それを意識の上に捉え来れば、もはや眼根の対象となつて、それは「法」という言葉に置き換えられる。色法というのは斯様な意味のものであつて、それは物質的存在ではなくて精神的存在である。「諸法」というのは、それを複數で表現した言葉で、現代語で分り易いときは「雑念・妄想」の類であると言つても差支がない。これが有為法の実態である。即ち、心の中へ形づくられたものなるが故に有為法と称せられるのであつて、それはやがて消え去るべきものだからこそ諸行無常といわれるのであり、また諸法無我ともいわれたのである。「行」もサンスカラの訳語で、「為作」とも訳される如く精神現象であつて、内容的には「法」と異なるものではなく、しかもそれは十二縁起支に加えられているように、雑染の法に他ならぬのである。

このように「色」の中にも、眼根の対境としてのものと意根の対境としてのものと二様があることが分り、厳密には「色法」といべきを単に「色」と表現したために、

外界の存在とその意義を混同して受け取られた場合があることも否定出来ないのである。

只、このようにして把握された「色」が執着によって心の中へ実在化することから、苦の世界が始まるのだということとを、五蘊や十二支縁起で表現したものなのであり、従つて「色」は物象そのものではなく、物質的性質を帯びた精神的存在、或は物質という觀念に捉われた迷いの心的状態などと理解するのが適當であらうと思われる。三界の中に「色界」とあるのも、実は物質界ではなく、物質的觀念に封殺された心の状態、即ち「色法」（心的存在）が存続する世界をいったものだと思ふべきである。色は物なりと簡単に割り切つて、色は心なりの一面があることを、仏者として忘れ去つてはならないのである。

日蓮聖人ご遺文の国語学的研究

——助詞「の・が」の待遇表現について——

春 日 正 三

(1) はじめに

鎌倉・室町時代の言語は、古代語と近代語の過渡期に立つものである。従って、この期の国語を知らずして国語史を語るわけにはいかない。ところが、鎌倉・室町期は政治的な混乱からその言語も複雑で、その実態が把握されていない。そのような国語混乱期のしかも関東方言の実態が、我が日蓮聖人のご遺文から、いささかでも分ったとしたら国語史上極めて好ましい。と言える。

(2) ご遺文の国語史としての資料価値

自信と自覚のあった泰時や仙覚が、東国語のために申しわけしなければならなかったその当時、京ことばを京なめりと言い、「言をは但いなかことはにてあるへし」とご存知『法門可申抄』の一節から知ることからできる。平安朝の京人から蔑まれた吾妻鴉の鳴き合いたる姿で押通せという気概は、新興宗教日蓮宗の教祖とし、関東勢のチャンピオンとしての気迫と威厳がこめられていることはもちろんであるが、国語史の立場からすれば、とりもなおさず東国

語の膨張力を示すものである。

(3) 待遇表現

国語において、話し手・聞き手および第三者の間の身分の上下関係や親疎によって、同じ内容の言語表現が場合によって異なった形をとる言語習慣がある。これを敬語というのであるが、それは人と人との待遇関係に基づくもので必ずしも敬意だけを表わすものではなく、ときによっては尊大や軽卑を表わすこともある。これを待遇表現という。

(4) 「の・が」待遇意識

十一世紀から十二世紀のころに表われた『今昔物語、巻二十四第五十六』。『宇治拾遺物語、九十三』「播磨守為家の侍さたの事」の条に、女から侍である沙汰が「さたが」と言われたことを「さたの」と言えと言って立腹した話がある。また、十七世紀から十八世紀に表われた国語文法書に「の」は第一人称及び尊敬される身分の第二人称に用いられ、「が」は第一人称及び身分の低い第三人称に用いられ、第二人称において特にその人を軽蔑するときに

用いられる。とある。一七七三年に書かれた『脚結抄』(富士谷成章)には、「里にかしづきては人ノといひ、いやしみしは人がといふ」とある。これらに對し一方では、『国語助詞史の研究』(弘前大学此島正年氏)のように、「帰納的に見ると尊卑説がやはり否定出来ないが、『の・が』の尊卑の差は本質的なものではなく、『が』の強示性から来る第二次的特徴である」という説もある。

(5) 資料として調査した御書

- ① 南条兵衛七郎殿御書 ② 法華題目鈔 ③ 法門可申鈔
- ④ 金吾殿御返事御書 ⑤ 十章鈔 ⑥ 戒体即身成仏義 ⑦ 諸宗問答鈔
- ⑧ 回向功德鈔 ⑨ 四恩鈔 ⑩ 月水御書 ⑪ 上野殿御家尼御返事 ⑫ 聖愚問答鈔上・下 ⑬ 種種振舞御書
- ⑭ 戒法門の十五書である。

今回発表したのは、聖人四十二歳から五十歳にかけてお書きになられたもので、昭和定本と、ご真蹟と対照することのできた①から⑤までの御書についてである。

(6) むすび

調査語数四五一語 敬意表現「の」の語数六十五語 卑称表現「が」の語数二十四語 敬意表現の対象 仏・釈迦如来・阿弥陀・弥陀・釈迦牟尼仏・教主釈尊・如来・諸仏・大菩薩・主師親・親父・普神・主人・太子・法皇・前王・輪王・智者・斛飯王・慈覺大師・聖人・日蓮房・女人・凡夫・念仏者・小兒卑称表現の対象 普尊法然・普公・然公・法然大日・日蓮・源賴義・提婆・阿難尊者・毘沙門天以上十三世紀の御書の「の・が」には尊卑の待遇意識があるとその尊卑説を肯定する。特に、「日蓮房の申候」には、日蓮房を客体化した表現として、国語敬語法の本質を追究する重要な資料を提供する。

(一九七〇、一一、三〇合掌)

三秘の序列に就て

長 井 弁 順

日蓮宗で発行された「日蓮宗々義大綱」を見るに三大秘